

AIが可能にする 「アイデア即プロダクト」の経済

経済学者 井上智洋

今話題のChatGPTという「言語生成AI」は、あらゆる質問に答えられるだけでなく、論文や小説、プログラムなどを生成できる。一方、Stable Diffusionのような「画像生成AI」は、例えば「浜辺で戯れるカップル」などと言葉を入力するだけで、相応する絵や写真の画像を生成可能だ。

こうした「生成AI」によって絵本、漫画なども創作できるし、それらを電子書籍として販売するのも簡単だ。いずれ、3Dプリンターなどと組み合わせることで、小物や家具といったものも個人でたまたまどこかに作れるよう

アーティストだけでなく、事務職や会計士・税理士などの士業、私のような教員・研究者など、ほぼ全てのホワイトカラーが生成AIの影響からは逃れられない。しかし、それはAIが全ての面で人間を上回るようになるということの意味しない。

今のAIに欠けているのは「意志」「体験」「価値判断」の三つだ。ChatGPTのような生成AIは、言わば「スーパー偏差値エリート」であるが、「指示待ち人間」でもある。自分で能動的に起業したり、新規事業を立ち上げたりする「意志」を持たない。

生成AIはまだ、部屋にこもりきりで、ひたすらネットサーフィンや読書にかまける「スーパーインドア派」のようでもある。潮手狩りもキャンプファイヤーも「体験」したことがなく、自らの「体験」に基づいて小説や映画を作ることもない。

さらには、自分で美醜や善悪などの「価値判断」を行うことができず、人間の判断を真似るにとどまる。したがって、人間のごとく脳裏にいくつもの斬新なアイデアを思い浮かべつつ、そこから望ましいものを取捨選択しながら作品を生み出すことができない。

になるだろう。

AIが可能にするのは、アイデアをすぐ形にできる「アイデア即プロダクト」の経済だ。そこでは絵が苦手でもデザインセンスがなくても、誰でもクリエイターになり得る。

その反面、並みの技量ではAIに太刀打ちできなくなるので、アーティストが職業としては成り立ちにくくなる。現在でも、「芸術家・デザイナー等」の有効求人倍率は0.18倍ほどであり、5人に1人くらいしか職を得られない。この倍率は今後ますます低くなるだろう。

要するに、オリジナリティのある作品の創造は難しいのである。画像生成AIに「ゴッホ風に東京タワーを描いて」と指示すればそのような画像を生成してくれる。だが、そもそも「○○風」は生み出し得ない。

それはもはや人間にも難しいのではないかと問われれば、絵画のような昔ながらのメディアではその通りと言ひほかない。

油絵具もカメラもテクノロジーであり、絵画も写真も一種のメディアである。新しいテクノロジーは新しいメディアを生み、その上で可能なアートがさまざまに模索され、いずれその可能性は取り尽くされる。

逆に言うと、テクノロジーが進歩する限り、新たなアートのジャンルが生み出されるので、人間の革新的なクリエイティビティを発揮し得る機会は残り続ける。

AI時代に活躍するために必要なのは、「意志」「体験」「価値判断」であり、テクノロジーを活用したクリエイティビティである。

子供たちを知識の詰め込みに駆り立て、点取りマシンに仕立て上げるような今の教育は、ドラスティックに改革されなければならないだろう。

This article appeared in the July 2023 issue of 中央公論 and is used with the permission of the author and the consent of the publisher. Please translate the entire article, including the title and author information. The translation should be complete, accurate, and as natural as possible. Please maintain the same paragraph structure that is used in the Japanese text.